

# 1890年代アカデミズムが見たニーチェ思想

## ——F・テンニースの場合——

松原 岳行

### はじめに

ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900) といえば、大学の講義で取り上げられたり哲学や倫理学の専門的研究テーマとなったりするなど、現在ではもっぱらアカデミックな関心を集める存在である。しかし歴史を遡れば、ニーチェほど同時代人に冷遇された人物はおらず、またその思想の受容史も——他の哲学者や思想家の場合とは異なり——当初はきわめて通俗的なレベルで展開されたことが明らかとなる。いったいニーチェの思想が学問的に論じられはじめたのはいつ頃のことだったのだろうか。

アカデミックな意味におけるニーチェ受容=広義のニーチェ研究が本格的に開始されたのは、巨視的に見れば、1890年代のニーチェブーム (※以下Nブームと略記) が沈静化した後、つまり20世紀初頭以降であった。ニーチェの過激なキャッチフレーズに熱狂する文学青年とそれを憂慮する年長世代や教師との対立図式、ニーチェ賛成派とニーチェ反対派の水掛け論——こうした喧噪の時代が過ぎ去ってはじめて、「ニーチェの言葉をどう解釈すればよいのか」や「ニーチェ思想の本質が何であるか」といった純粹にアカデミックな問題関心が生じてきたと説明されうるのである。

しかし1890年代のニーチェ受容をめぐる状況に徹視的な視線を向けるとき、そこにはすでにニーチェに関する議論を試みたアカデミカーの姿を確認することもできる。例えば人智学の提唱者R・シュタイナーは1892年頃からニーチェ思想とその人格を精神病理学的に解明しようと試みている<sup>1)</sup>、また文化教育学の代表者F・パウルゼンは1897年の評論の中でニーチェ思想を「知的無政府主義」と意味づけている<sup>2)</sup>。このようにニーチェ論の先駆的試みはこの時期すでに登場しつつあったのである。むしろその議論のレベルは——彼らが本来の専門領域で残した業績、専門的なニーチェ研究に比して——決して高いものとは言えず、そのことが1890年代アカデミズムの試みに対する無関心を助長してきたことは否めない。しかしながらいまはむしろ、彼らがなぜその程度のニーチェ論しか残せなかったのかという観点から1890年代アカデミズムが見たニーチェ思想の具体的内実や意味を解明することの方が重要ではないだろうか。

そこで本稿ではフェルディナント・テンニース (Ferdinand Tönnies, 1855-1936) に注目して上述の問題を検討してみたい。言うまでもなくテンニースは現代社会学の源流をなすドイツの著名な社会学者であるが、1887年に代表作『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト (Gemeinschaft und Gesellschaft)』を発表しているという意味においても紛れもなく1890年代ドイツを代表するアカデミカーのひとりである。また彼は17歳の時にニーチェの著作に出会い、1887年に本格的に学者デビューを果たした後の1890年代には2編のニーチェ論を発表している点でも非常に興味深い考察対象である。にもかかわらずニーチェに関するテンニースの発言はこれまで、テンニース研究の分野においてもニーチェ受容史研究の分野においても、決して十分に検討されてきたとは言えない状況にある<sup>3)</sup>。

以上の問題関心から本稿では、テンニースが残したニーチェに関する発言をまとめ、ニーチェ思想に対する1890年代アカデミズムの反応の一類型を明らかにする。具体的にはまず、パウルゼンとの往復書簡集 (1876-1908年) および自伝 (1922年) を手掛かりにしなが、若きテンニースとニーチェ思想との関わりについて考察する(①)。次に、主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』執筆前後のテンニースの動向と同時期のニーチェ受容をめぐる状況を確認する(②)。続いて1890年代に出版されたテンニースの2編のニーチェ論、1893年論文「ニーチェばか (Nietzsche-Narren)」と1897年著作『ニーチェ崇拜 (Der Nietzsche-Kultus)』を取り上げ、テンニースにおけるニーチェ理解の内容および特質(③)、1890年代アカデミズムが置かれた状況(④)などを検討する。そして最後にテンニースのニーチェ論の意味を多角的に考察して本稿のまとめとしたい。

## 1 若きテンニースとニーチェ思想：1873-1883年

### (1) ニーチェ初期思想との邂逅

テンニースは1872/73年冬学期 [※17歳のとき] にニーチェの『悲劇の誕生』と出会う。そのときの思い出を彼は次のように回顧している (※以下テンニースからの引用は出版年とページ数のみを示す)。

「(……) ショーウィンドウに陳列されていた一冊の本が私の目にとまった。その表書きには『音楽の精神からの悲劇の誕生』フリードリヒ・ニーチェ著とあり、それが私の心を強く捕らえた——当時いったい誰がこの存在に注意を払っただろう？ (…中略…) そのニーチェの本の購入を即決することは学生の私にはさすが

にできなかった。だが1873年の夏休みにフーズムの学校図書館でそれを見つけ、ウキウキしながら、いやそれどころかほとんど啓示を受けたような感慨をもって読んだのだった。」(1922,S.203)

ニーチェの処女作『悲劇の誕生』は1872年1月2日フリッチュ書店から1,000部発行された。この数字をどう解釈するのだが、ちょうどテンニースの自伝が発表された1922年までに『ツァラトゥストラ』が累計発行部数300,000部以上を記録していた事実を想起すれば<sup>4)</sup>、テンニースの申告どおりニーチェは当時はまだ無名の存在であったと言えるだろう。そのような時代にテンニースはニーチェの著作と感動的な出会いを経験したのである。

『悲劇の誕生』との出会いから1年後、テンニースは1873/74年冬学期をライプツィヒで過ごし、1874年の夏学期にはボンへ移る。この頃のテンニースは精力的に大学の講義に出席し、学術レポートの作成にも力を注いでいる。いわば学者としての自覚が芽生えつつあった時期であるが、当時をテンニースは次のように振り返る。

「ライプツィヒでもボンでも哲学講義は受講しなかった。だが両方の地で私は大学図書館の閲覧室にこもり、新聞だけではなく多くの著作を読んだ。ライプツィヒで私はニーチェの反時代的考察の第1論文『ダーフィット・シュトラウス、信仰者および文筆家』を見つけた。私もよく知っていた『古い信仰と新しい信仰』に関するものであった。私が聞き知っていた最初のシュトラウス批判というわけではなかったが、これほど強い感銘を受けたのははじめてだった。ある日、私は本屋で第2の『反時代』[生に対する歴史の功罪]を見かけた。私はさっそくそれを買求め、深い感動を味わった。それ以来私はニーチェの作品ならどれでも出版と同時に手に入れた。たとえ徐々に熱が冷めていってもそうだった。」(1922,S.204-205)

「強い感銘を受けた」とか「深い感動を味わった」など——およそ自伝で描かれる青春時代の思い出は一般に誇張されたり美化されたりするものかもしれないが、ありうべき脚色分を差し引いたとしても、青年テンニースがニーチェ思想に強い関心を抱いていたことは間違いと思われる。ニーチェの『反時代的考察』第1論文「ダーフィット・シュトラウス、信仰者および文筆家」は1873年8月8日に、第2論文の「生に対する歴史の功罪」は1874年2月下旬にそれぞれ初版が発行されており、販売実数に関するデータは1874年11月時点で、前者が500部、後者が200部とあまり芳しいものではなかったとの記録が残っている(『ニーチェ事典』709頁：※以下『N事典』と略記)。こうした歴史的事実は当時の彼のニーチェに対する関心の高さを逆証するものであろう。テンニースは歴史上もっとも早い時期に属するニーチェ読者だったのである。

(2) 熱狂的ニーチェファンとしてのテニース

1875/76年冬学期「自分が何をしたいのかも全くわからないまま」ベルリンに向かったテニースはこの地である人物と出会うことになる。長年にわたって手紙の遣り取りをし、主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を捧げることになる相手 (Vgl. 1922, S.215) ——テニースより9歳年上の教育学者パウルゼン (Friedrich Paulsen, 1846-1908) である。

「パウルゼンの私への影響力は最初から絶大なものであった。(…中略…) 哲学史に関する観点、自然科学的・歴史的な認識、それらに負けるとも劣らない彼の——純粹に真理を追究する感覚と社会的な心情で満たされた——人格 (Persönlichkeit) は、私の中に深く実り豊かな影響をとどめた。」(1922, S.206)

自伝にこう記すほどテニースにとってパウルゼンは重要な存在だったわけだが<sup>5)</sup>、そのパウルゼンに宛てた手紙の中でテニースはしばしばニーチェの話題を挙げている。手紙の文面からは、当時テニースがいかにニーチェに夢中になっていたかが伝わってくる。例えば1880年に投函されたパウルゼン宛の手紙 (1880年2月29日-3月1日付) には次のようにある。

「(どこかの無法者たちが噂しているようですから言っておきますが) ニーチェは断じて精神病なんかではありません。彼はナウムブルクで母親と一緒に生活しています。ただ頭痛にはかなり苦しめられているようで、もうこれ以上長く生きられないと思うほどその症状は重いようです。」(Briefwechsel, S.74)

ニーチェが病弱でしばしば偏頭痛や嘔吐に苦しんでいたことは今では常識の域に属する伝記的事実であるが、テニースはニーチェの病状をじつに詳細に把握していると言える。実際この手紙が差し出された前年(1879年)、ニーチェは極度の体調不良に悩まされ118日間も病床に伏していたとの記録がある (『N事典』710-711頁)。情報の正確さもさることながら、安易な噂話に惑わされることなくテニースがニーチェの病状を本気で心配していた事実は注目に値しよう<sup>6)</sup>。テニースの関心はもはや著作のみならずニーチェ本人へと向かっていたのである。

ちょうどその頃ニーチェは、体調不良を理由に休職中だったバーゼル大学教授職を辞し、季候のよい土地を転々としながら『ツアラトウストラ』の本格的な執筆に取りかかる。ニーチェと友人パウル・レー (Rée) とルー・ザロメ婦人 (Salomé) の奇妙な三角関係がはじまったのは1882年4月頃のことである。ニーチェは何度かザロメに求婚するが拒絶され、レーとザロメvsニーチェの対立図式が次第に鮮明になる。1882年の12月にニーチェは自殺を考えるほど精神的に追いつめられ麻酔薬を濫用したという

報告もある（『N事典』712頁）。その後ニーチェは1883年6月に『ツァラトゥストラ』第1部を公刊、同月『ツァラトゥストラ』第2部の執筆のために季候のよいスイス地方のジルスマリーアへと向かった。

ここでニーチェの失恋体験について触れたのには理由がある。じつはニーチェが自殺を考えた1882年12月にベルリンでレーとザロメを囲むサークルが立ち上がり、テンニースもそのサークルに顔を見せていたという記録が残っているのである（『N事典』712頁）。ただ当時レーおよびザロメとニーチェとの関係に亀裂が生じていたことをまだ知らなかったテンニースは、あるときスイス地方に滞在していたレーとザロメの誘いを受けて、いよいよニーチェと面識を得ることができるのではないかと期待する。そのときの彼の興奮ぶりはパウルゼンに宛てた手紙（1883年5月31日付）の文面によくあらわれている。

「おそらく7月になったら私はベルリンを経由して、その足でバイロイトまでパルジファルを観劇に行く予定です。ひょっとしたらベルリンではあなたのもとでお世話になるかもしれません。その後はエンガディーンに足を伸ばすことになりそうです。というのはレーとザロメ嬢がエンガディーンへ来るよう親切かつ猛烈に私を説得するからです。おそらくそこではニーチェとも知り合いになれるでしょう。あなたは山がお好きなのだから8月にでもエンガディーンに来てください。そしたらランガートの山頂目指して登山できるじゃないですか。」(Briefwechsel, S.185-186)

結局テンニースはニーチェと個人的に面識を持つにはいたらなかった。スイスには出掛けたが、ニーチェとレー・ザロメの関係が悪化していたためにニーチェを紹介してもらえなかったのである。それでもテンニースはニーチェが訪れていたジルスマリーアに単独で向かい、しばらくその地に滞在しながら、散策中のニーチェの姿を目撃したり、ときにはニーチェからの「刺すような視線」（1922, S.214）を感じたりしたという<sup>7)</sup>。青春時代のテンニースは紛れもなく熱狂的なニーチェファンだったのである<sup>8)</sup>。

## 2 その後のテンニースとNブーム：1883-1892年

### (1) 沈黙するテンニースとニーチェ思想の受容状況

これまでパウルゼンとの往復書簡および1922年執筆の自伝を手掛かりに若きテンニースとニーチェとの関わりについて確認してきたわけだが、以上の考察から、1872/73年の冬学期以来テンニースがニーチェに高い関心を示していたことは明らかであろう。

ところがニーチェを追ってジルスマリーアに向かった1883年以降、テンニースは——少なくとも往復書簡や自伝を見る限り——ニーチェに関する発言を控えるようになる。このことがニーチェ思想に対する関心の低下を意味するかどうかは別にして、結局テンニースが再びニーチェの名を挙げるのは1893年の小論「ニーチェばか」においてである。テンニースがなぜ1883年を堺にしばらくニーチェについて発言しなくなったのか——その直接的な原因については、テンニース自身が語っていないため特定できないが、例えばニーチェと面識を持つ機会を逸したこと、テンニース自身の問題意識とニーチェ思想とのあいだにズレが生じたこと、あるいは学者テンニースの出世作となる『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の執筆に専念したことなどの要因が複合的に作用したのではないかと推測されよう。いずれにせよテンニースは1893年に最初のニーチェ論を発表するまでの10年間、ニーチェに関して「沈黙」を守るのである。

ではテンニースが沈黙しているあいだニーチェの周辺では何が起こったのだろうか。1883年以降といえば、『ツアラトウストラ』をはじめ『善悪の彼岸』や『道徳の系譜』、『反キリスト』などの話題作が生まれた時期であるが、じつは当時のニーチェは必ずしも同時代的な関心を集めていたわけではなかった。例えば『ツアラトウストラ』第4部などは辛うじて個人的に40部印刷できたほどであり、他の著作もほとんど自費出版を余儀なくされていたほど、ニーチェの著作は売れなかったのである。1888年4月にゲオルグ・ブランデスから寄せられたニーチェ講演成功の知らせを除けば、ニーチェをよろこばせる便りは何ひとつ届かなかった。翌1889年1月3日、ニーチェはトリノのカルロ・アルベルト広場で昏倒し、以後1900年8月25日に死去するまで二度と正常な精神状態を取り戻すことはなかったと言われる。

ところが皮肉なことに、ニーチェ発狂後にわかにNブームの徴候が見えはじめる。1890年4月にはブランデスがニーチェ論「貴族的ラディカリズム」を発表、1891年1月にはニーチェとの結婚を拒絶したルー・ザロメ婦人が『自由舞台』誌上に「フリードリヒ・ニーチェの肖像に寄せて」を寄稿した。ちょうどこの頃からドイツ国内におけるニーチェに対する関心は急激に高まり、文芸誌を中心に多くのニーチェ論が寄せられることとなる。その一方でニーチェ思想は小説や詩のモチーフとして文学青年たちにもてはやされ、1890年代には「ニーチェ小説」と形容される多くのパロディ作品が誕生した。また多くの場合彼らは何らかの文学系サークルに所属し、大都市のカフェやキャバレーで仲間たちとニーチェの話題で盛り上がった。『ツアラトウストラ』で告知される「超人」の到来、『善悪の彼岸』や『道徳の系譜』で展開される道徳批判、「主人道徳と奴隷道徳」…これら耳慣れない考え方や過激なキャッチフレーズが当時の青年の心を強く捕らえたのである。

## (2) 1890年代のNブームの実態

1890年代のNブームが具体的にどのように展開されたのか——その典型例を当時の文学作品のうちに確認しておこう<sup>9)</sup>。ここで取り上げるのは、画家・著述家でもあったオーストリアの女権論者マイレーダー＝オーバーマイヤー (Mayreder-Obermayer) が雑誌『自由舞台』誌上に発表した小説『超人クラブ (Der Klub der Übermenschen)』(1895年)である。主人公はブルジョア階級の青年7名であり、彼らによって全会一致で採択された名称が「超人クラブ」であった (Mayreder-Obermayer, S.1212-1213)。彼らは大都市の路地裏にあるいかがわしいカフェバーに昼間から出入りし、飲酒・喫煙を繰り返していた (S.1213 u.a.)。例えば「超人」を主人公にした合唱つきの悲劇作品を創作したり (S.1214), 『自由新聞』という名称の雑誌を創刊しようとするなど (S.1215), 彼らは文化的な活動にも従事するが、最終的にこのクラブは「無政府主義的傾向を持つ秘密結社」(S.1220)の嫌疑をかけられ、一斉摘発を受ける。秘密の引き出しに保管されていた「速記の議事録」や「会員規約」も押収され (S.1219), まもなくメンバー全員が警察で事情聴取を受けることになる (S.1220ff.)——以上がこの小説の概要である。

「超人クラブ」という同好会名<sup>10)</sup>がすでに、1890年代の文学青年が「超人」にどれだけ魅力を感じていたかを示す興味深い一例であると言えよう。小説中の言葉を借りれば、青年たちは「超人になるという自尊心をくすぐるような誘い文句」(S.1213)に夢中になったのである。では当時の青年は「超人」に何を夢見ていたのだろうか。重要な手がかりを与えてくれるのは、押収された「会員規約」の内容である。「何ものも真ではない、一切は許されている (Nichts ist wahr, Alles ist erlaubt)」(KSA5, S.399)というニーチェの言葉<sup>11)</sup>の細則として付記された次の三箇条は注目に値する (Mayreder-Obermayer, S.1213)。

I : 全員ありのままにいること (Jeder ist, wie er ist)

II : 全員したいことをすること (Jeder thut, was er will)

III : 全員出来る限り多くのものを所有すること (Jeder hat, soviel er vermag)

いかなる真理への意志も否定するニーチェの価値相対主義的見解が、ここでは道徳的無規律状態を奨励する言葉になっていることがわかるだろう。メンバーにとっては、自分の「利己心」をどれだけ発揮できるかが「超人」になる鍵だったのである。このように考えると、1890年代のNブームは、ニーチェ思想の誤解に基づく文学青年の道徳的頹廢行動として展開されたと見ることもできるだろう。

「ニーチェが呪文を語り終えると、突然ドイツでは誰もが超人になった。(…中略…) 人々は借金を作り、少女を誘惑し、泥酔した。どれもこれもツァラトウストラの名誉のためになされた行為だった。」(Berg1897, S.216f. zit. n. Hillebrand 1978, S.13; 邦訳版274頁)

ベルクのこの描写が象徴的に示しているように、1890年代のNブームは、概念やモチーフを援用するといった通常のレベルを超えて、青年の生活スタイルや行動パターンを規定するという形態を見せた<sup>12)</sup>。1892年に発表されたある論文にも、青年の「超人」受容は次のように描写されている——「現代の青年は、不潔なシャツの襟を立て無精ヒゲを生やした面構えでライプツィヒ通りをよたよた歩き、超人気取り (Allüren eines Uebermenschen) を誇示している」(Servaes 1892, S.86)。1890年代はいわば青年＝道徳的頹廢行動＝「超人」という等式が端的に成立した時期でもあったのである。そしてこのようなNブームが青年のあいだに蔓延しはじめていた1893年、テンニースは10年もの「沈黙」を破ってニーチェについて再び発言するのである。

### 3 ニーチェ後期思想に対する批判：1890年代

テンニースは1893年論文「ニーチェばか」の冒頭で「じつに不愉快な劇の目撃者となった」と述べ、その「劇」の内容を次のように描写する。

「その不愉快な劇 (widerwärtige Schauspiel) というのはこうだ。つまり、主人公ニーチェ (N.) はかつて精緻で機知に富んだ何冊かの本を著述した——彼はまだ無名 (unbekannt) であった。彼は半ば常軌を逸した数冊の本を執筆した——そして有名 (berühmt) になった。」(1893, S.5)

かつて「無名」だったニーチェがやがて「有名」になるというのがテンニースの目撃した「劇」のあらすじであるが、興味深いのは、無名時代のニーチェの著作が高く評価されているのに対して、その後のニーチェの著作が「半ば常軌を逸している (halb-toll)」と著しく否定的に語られていることである。かつてあれだけ読書に没頭し、本人と面識を持ちたいとまで願っていた相手とは思えないほど、ここでのニーチェ評は厳しい。「沈黙の10年間」を堺にニーチェに対するテンニースの評価は完全に「逆転」したとも言えよう。「後期のニーチェは初期の自分をことごとく否定した。(…中略…) 彼の『脱皮 (Häutungen)』は正常な発達段階の軌道を示さなかった。」(1893, S.22)——このことがテンニースには残念だったのである。ではテンニースはニーチェの後期思想をどのように論じているのだろうか。

例えばテンニースは『ツァラトウストラ』を次のように批判する。



「ツァラトウストラとしてのニーチェ (Nietzsche als Zarathustra) にとって、ありきたりの尺度はどうでもよいことなのだ。それどころか彼は、不道徳とはいかないまでも道徳性に欠ける超人の振舞いを多めに見るどころか、唯一価値の高いものとして描き出そうとするのである。」(1893,S.7)

たしかに「超人」はニーチェ自身によって明確に定義づけられている言葉ではなく、『ツァラトウストラ』という作品自体に詩的な要素が多く見られるため、その解釈は今日のニーチェ研究の水準を持ってしても容易ではないが、それでもここで披露されたテンニースのニーチェ理解は、名高い社会学者のものとは思えないほど低次元の解釈にとどまっているように思われる。むしろその解釈は先に取り上げた小説『超人クラブ』や当時の文学青年に近いと言えるだろう。ここには「超人」の自己教育的な意味は一切見出されない。

また1888年に執筆されニーチェ発狂後の1895年にケーゲル版の全集第8巻としてはじめて世に問われたニーチェの著作『反キリスト』に関して、テンニースは1897年著作『ニーチェ崇拜』のなかで次のような見解を示している。

「そもそもこの『反キリスト』は、外見上は論理や心理学、歴史が備わっているように見えるが、実際のところ何ひとつ学問的な価値 (wissenschaftlichen Wert) は認められない。それは憎悪と激怒以外の何ものでもなく (…中略…) 乱暴な道徳論か近視眼的なイデオロギーでしかないのに、威勢のいい言葉だとか弁護士風の狡賢さ、ベテランの域に達した不誠実さだけは備えているような代物で——つまりこれは作文練習 (Stilübung) 以外に使い道はないのだ。この本から学べることと言えば、それは科学的・社会的な思想家 (ein wissenschaftlicher, ein soziologischer Denker) にとって許されない態度がどういうものかという一点を除いて他にはないだろう。」(1897,S.88-89)

晩年の著作『反キリスト』に関しては、現在でも「饒舌でとどまることを知らない罵倒はいささか抑制を欠くきらいがある」などと評されることもあり (『N事典』21頁)、その意味でテンニースの反応には十分に首肯しうる点もある。しかしテンニースの側にも学者としての冷静さを欠く部分があると言えないだろうか。指摘された内容は的確であるとしても、その語調が「売り言葉に買い言葉」的なレベルにとどまっているからである。

このようにニーチェの後期思想に対するテンニースの見解は一貫して否定的・批判的である。彼によれば、「超人」や「貴族主義」、「あらゆる価値の価値転換」<sup>13)</sup>や「善悪の彼岸」、「主人道徳と奴隷道徳」など…ニーチェの後期思想に登場する様々な言葉は互いに何の連関も持たない単なるキャッチフレーズ群でしかなく、またニーチェも

これら多種多様な言葉で「ふざけているだけ」であるため、ニーチェ思想と真剣に取り組もうとすれば「期待を裏切られる」ことになるという（1897, S.VII u. S.14-15）。結局テンニースはニーチェの後期思想を次のように特徴づけるのである。——「彼の最後の諸著作が見せているのは、歪んだ表情を浮かべた醜悪な姿（das häßliche Bild verzerrter Mienen）か、酔っぱらいや常軌を逸した人物、自暴自棄の人物（Trunkenen, Überspannten, Verzweifelnden）が見せる（…中略…）つまりデカダン（Dekadenten）の見せる態度である」（1897, S.VI）。

それにしてもニーチェの後期思想に向けられたテンニースの言葉はいささか感情的でと見えよう。Nファンだった若き日の手紙の文面でなら内心の率直な表現も許されるかも知れないが、このときすでにテンニースは主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』（1887年）を発表し、本格的に社会学者としての道を歩み始めていたはずである。仮にニーチェの後期思想を批判するのであれば、やはり「学者」にふさわしい冷静かつ客観的な分析が求められるところであろう。なぜテンニースはニーチェを批判するのにこれほど乱暴な言葉遣いを用いる必要があったのだろうか。

#### 4 1890年代アカデミズムの限界——テンニースのNブーム批判から——

例えば1893年の小論には次のようなフレーズがある。

「哀れなニーチェよ！これこそ本当に悲劇的な運命だ。君の名声は、不良化して荒れた若者たちがふれて回っているような酔っぱらいの名声と同じなのだ。以前の君ならもっとすばらしい名声を勝ち得るに値していたのに。——」（1893, S.6）

この嘆きは、テンニースがニーチェの初期思想を高く評価していたこと、初期思想との対比において後期思想を痛烈に批判していることなどを示す証拠資料である。ただここでも「哀れなニーチェよ（Armer Nietzsche）！」（1893, S.6, S.21, S.27）という感嘆符付きのフレーズ<sup>14</sup>やニーチェを「酔っぱらい」扱いするような比喩など、当時第一線で活躍していた社会学者のものとは思えない表現が用いられている。こうした言葉の裏には何があったのか。

やや結論を先取りして言うならば、Nブームの存在が彼の感情的な言葉に大きく影響しているというのが本稿の見方である。すなわち1893年の小論「ニーチェばか」と1897年の著作『ニーチェ崇拜』は、そのタイトルに予示されているとおり、1890年代のNブームの担い手である文学青年と道徳的退廃現象としてのNブームをそれぞれ問題にしているのである。例えばテンニースは1893年小論の中で当時のドイツ文学の状況を次のように描写している。

「もし仮に酔っぱらい (trunkener Mann) が現れて、ろれつの回らぬ舌でわめき罵り、ときに奇声を上げ、ときに威嚇したり悪態をついたりし、あるいは呻き声を上げて嘆き悲しみ、そして崩れるように倒れるまで路地裏をさまよい歩いていれば——小僧たちは酔っぱらいを取り囲み大はしゃぎするだろう。彼らはその男の足取りをついて回り、彼の仕草や挙動を真似する (nach-ahmen) だろう。またかなりたちの悪い若者たちの場合、彼らは彼に対して悪口すら言うだろうし、彼を踏みつけにするだろう。——そのような若者たちなら今日のドイツにおいては事欠かない。あなた方も路地裏 (Gasse) や下水溝 (Gosse) に彼らを見出すはずだ。つまり新聞や週刊誌、月刊ジャーナル誌の中にである。」(1893,S.5)

冒頭に登場する「酔っぱらい」が仮にニーチェのことを指しているのだとすれば、ここに描かれた内容はまさにNブームに対する批判、すなわち1890年代以降『自由舞台』などの多くの雑誌や新聞をはじめ、小説や詩などの文学作品においてもニーチェが取り沙汰された流行現象の批判的描写であると解釈できる。またニーチェに熱狂する文学青年がベルリンなどの大都市で道徳的退廃現象を巻き起こしていたことも1890年代Nブームの一側面であったが、この点についてもテンニースは批判的に捉えている。

「(…前略…) 貧相で平凡な半端な才能からますます多く登場するのは、厚かましい、きわめて厚かましい精神 (freche, sehr freche Geister), つまり疑いなくこれまでろくなものを学んだことがなく、理路整然とした思考能力を持っているわけでもないのに、言葉や決まり文句だけはまったく意のままに操れるような輩である。連中は、昼夜を問わず大都市のカフェ (Cafés der Großstädte) に入り浸り、向こう見ずな口をたたいたり、その脳を朦朧と混迷させたり、たばこの臭いを漂わせている。——このような下らぬ連中にとって、自分の責任で生きよという天才の自由の告示は、彼らの安寧の知らせ、彼らの道徳意識向けの機知に富んだ度数の高いアルコール (geistreicher Alkohol) となってしまったのだ。」(1893,S.10)

テンニースはニーチェ思想が青年の道徳感情を麻痺させる「度数の高いアルコール」のように作用していることを憂慮しているのである<sup>15)</sup>。文学青年がニーチェの「常軌を逸した」思想に目をつけ、その過激な言葉が青年たちを熱狂させ、興奮した文学青年が道徳的退廃現象を展開する——こうした憂慮すべきNブーム現象を前に、テンニースの言葉は激しくならざるを得なかったのかもしれない。「本書において私が願っているのは、注意深さ、慎重さ、冷静さを喚起することである」(1897,S.VIII)——これは『ニーチェ崇拜』の序文で語られた言葉であるが、Nブームに対する彼の過剰な批判意識

は、皮肉なことに、ニーチェ思想の問題点や危険性を冷静に論じるべきテンニース自身から「注意深さ」「慎重さ」「冷静さ」を奪ってしまったのである。

いったいこれはテンニースの場合にだけ見られる特殊な事例なのだろうか。それとも当時の学者にある程度共通してみられる傾向なのだろうか。この点を確認するために、テンニースの『ニーチェ崇拜』に対するパウルゼンの反応を取り上げてみよう。テンニースは1896年大晦日パウルゼンに宛てて手紙を出し、まもなく自著が出版されることを伝えている<sup>16)</sup>。その返信(1897年2月4日付)の中でパウルゼンは次のような感想を述べている。

「親愛なるテンニース！(…中略…) さて例のニーチェ本ですが、大変楽しく読ませていただきました。面白かったので短時間で読み終えてしまいました。まさに今がチャンスでしょう。たしかにニーチェばか(Nietzschenarren)が改宗することはないかもしれませんが。でもまだそうならない若者たちなら救いようがあります。彼らがニーチェに背を向けて自由になるよう手助けすることは可能なのです。」(Briefwechsel, S.320)

このようにパウルゼンは、テンニースの著作『ニーチェ崇拜』に対して好感触を示すと同時に、「ニーチェ崇拜」それ自体=Nブームに対して批判的な見方をしていることがわかるだろう<sup>17)</sup>。手紙のみならず、パウルゼンはある新聞の日曜版(1897年3月14日付)に「ニーチェ崇拜について(Zum Nietzsche-Kultus)」と題した評論を寄せ、青年たちに推奨すべき好著としてテンニースの著作『ニーチェ崇拜』を高く評価している(Paulsen 1897 zit.n. 1905, S.54)。パウルゼンのこの反応は、当時のアカデミカーがNブームをどれほど憂慮すべき現象と見ていたかを示す好例である。本来持ち得ていたはずの明晰な洞察力や学者としての冷静さを保てないほどNブームは激しく展開されたのであり、テンニースの場合に見られた非学者的な姿勢は1890年代にニーチェについて発言したその他のアカデミカーにも共通してみられる特徴である。Nブームとの距離の近さ——これが1890年代のアカデミズムの宿命的な限界だったのである。

## おわりに

1893年と1897年の2つのニーチェ批判の後、テンニースが再び表立ってニーチェの名前を挙げるのは、本稿前半でしばしば取り上げた1922年の自伝においてである。興味深いのは、その沈黙期間の長さよりもむしろ、これだけ激しいニーチェ批判を展開しておきながら若き日のニーチェ読書の思い出を隠さなかったテンニースの意識である。テンニースにとってニーチェの初期思想は最後まで批判すべき対象とはならなか

ったし、またニーチェに夢中になった青春時代も消したい過去ではなかった<sup>18)</sup>。1890年代の小論「ニーチェばか」と著作『ニーチェ崇拜』を除けば、テンニースにとってニーチェは決して悪くない思い出であったのである。では学者テンニースにとってニーチェ思想はいかなる意味を持ち得たのだろうか。

少なくともテンニース自身は自らの社会学理論に対するニーチェ思想の影響作用については何ら言及していない。また例えば『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』論の基礎となっている意志論——本質意志と選択意志——がホップズ、スピノザ、ショーペンハウアーと並んでニーチェの着想をモチーフにしているとの指摘もあるが、この言及それ自体がニーチェ研究側のものであって（『N事典』384頁）、テンニース研究の観点からは、青春時代のニーチェ読書経験はおろか1890年代の2つのニーチェ論すら取り上げられることは稀である<sup>19)</sup>。このような事情に鑑みれば、テンニース社会学におけるニーチェ思想の意味については消極的な回答をしなくてはならないだろう。

この点については1990年Reprint版の編者でもあるテンニース研究者のルドルフも同様である。というのは彼もまた最終的には両者の影響関係をテンニース個人の問題へと還元してしまうからである。「たしかに『ニーチェ崇拜』は、テンニースの筆から生まれ出た社会的なテーマのほぼ1000編にも及ぶ出版物の中のわずかばかりのほんの一部にすぎない。しかし大きな全体のこの一部分には、ニーチェを通して、ニーチェを超えて（durch Nietzsche hindurch und über Nietzsche hinaus）、新たな対象や領域へと突き進んだすぐれた科学者の人格の精神的豊かさが映し出されている。」

（Rudolph, S.138）——結局ルドルフもこの両者の学的な影響関係を明確に示せているとは言えない。さらに言うならテンニース自身、『ニーチェ崇拜』の冒頭で「本書は私にとってひとつの個人的な問題としての意味を持っている」と表明している（1897, S.V）。このように考えると、テンニース社会学（学者テンニース）におけるニーチェ思想の必要性が疑問に思えてくる。若き日の読書経験は別にして、少なくとも1890年代のニーチェ批判には、テンニース社会学側における内的必然性を認めがたいのである<sup>20)</sup>。

だとすればテンニースの1890年代の発言は、ニーチェ思想に対する純粋な関心からというよりもむしろ、青年世代に巻き起こったNブームへの批判意識から執筆されたと考えるのが自然ではないだろうか。1890年代アカデミズムとNブームの距離の近さについては先述したとおりであるが、しかしだからといってこれは、Nブームさえ興らなければテンニースは学者として冷静かつ明晰なニーチェ論を執筆できたのではないかという憶測の蓋然性を高めるものではない。むしろ逆である。仮にNブームが訪れていなかったならば、テンニースは敢えて1890年代に再びニーチェについて発言し

なかったのではないだろうか。このように主張するのは、1883年から1892年まで続く「沈黙の10年間」があるからだ。ニーチェ解釈にせよニーチェ批判にせよ、もしテンニース社会学の側にニーチェを論じるべき内在的な根拠があるなら、テンニース社会学の根幹に位置づく1887年の『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』発表前後にニーチェに関する発言が見られるはずである。ところがその形跡は当時の出版物にもパウエルゼン宛の書簡にも認められない。このように考えれば、そもそもテンニースのニーチェ論の成立それ自体がNブームに起因していたとも言えるだろう。

最後にニーチェ受容史研究の視点から、テンニースの場合に見られたような1890年代のアカデミズムによるニーチェ論の意味を簡単に整理して、本稿を締めくくりたい。

まず指摘できるのは、彼らがほとんど研究の蓄積がないニーチェという「未知の領域」にはじめて足を踏み入れたという点である。仮にそれがNブームの蔓延という外発的な動機に基づくものであったとしても、またその水準が決して高いものではなかったとしても、彼らは従来の価値規範や宗教観、自らの学問的・政治的立場を規準にしつつ、得体の知れないニーチェ思想の問題点や危険性を明らかにしようと試みたのである。彼らの姿勢は、刺激的なキャッチフレーズを並べてニーチェの口吻を真似するだけの文学青年とは明らかに異なっている。実際テンニースは、「超人」や「善悪の彼岸」や「主人道徳と奴隷道徳」のあいだに意味連関を見出すことはできなかったが、それでもニーチェ思想の貴族主義的・利己主義的な傾向を読み取り、ニーチェを「資本主義の哲学者 (Philosophen des Kapitalismus)」(1893, S.10) と特徴づけている<sup>21)</sup>。彼らは紛れもなくニーチェ研究史上の最初の頁にその名を刻まれるべき存在なのである。

1890年代アカデミズムが果たしたもうひとつの功績。それは19-20世紀転換期以降に本格的に開始されるアカデミックなニーチェ研究にとって批判すべき先行研究（一言で表現するなら「反面教師」）となったということであろう。というのも次世代のニーチェ論には、例えば客観的にNブームの構造分析をしたり、あるいはNブームでもてはやされた後期思想だけではなくニーチェ思想全体を時系列的に論じたりするなど、明らかにNブームに対して一定の距離を確保しようという意識が見られるからである。やや逆説的ではあるが、1890年代のアカデミズムは自らの失敗例をもってNブームとの距離の確保の重要性を次世代に伝えたのである。

## 註

(1) 当初より精神病理学に興味を抱いていたシュタイナーは、例えば以下のような論文の中でニーチェ思想

- と精神病との関連性などを検討している。①Steiner, R. : Nietzscheanismus. In : Litterarischer Merkur.12. Nr.14. (2, April, 1892), S.105-108. ②Steiner, R. : Die Philosophie Friedrich Nietzsche's als psycho-pathologisches Problem. In : Wiener klinische Rundschau. 1900, Nr.30. S.598-600 u. Nr. 31. S.618-621. ③Steiner, R. : Friedrich Nietzsche's Persönlichkeit und die Psycho-Pathologie. In : Wiener klinische Rundschau. Nr.37 1900, S.738-741.
- (2) パウルゼンも1890年代以降しばしばニーチェ思想に言及している。①Paulsen, F. : Zum Nietzsche-Kultus (In : Vossischen Zeitung, 1897, 3, 14). In : Zur Ethik und Politik. Gesammelte Vorträge u. Aufsätze. Bd.1.Berlin 1905, S.54-58. ②Paulsen, F. : Das geistige Leben des deutschen Volkes im neunzehnten Jahrhundert (In : Hilfe 1900, 1, 7). In : Zur Ethik und Politik. Berlin 1905, S.59-66.
- (3) テンニースのニーチェとの関わりに注目した研究者としてルドルフ (Rudolph, G.) の名を挙げる事ができる。彼は従来ほとんど無視されてきたテンニースの2編のニーチェ論を1990年にReprint版として紹介した。また同書に収録された論文のなかでルドルフは、テンニースのニーチェ論を「徹底的な批判的解体が繰り返された著作のうち、一時的にニーチェに熱狂した人物が試みた最初で唯一のニーチェ批判」(Rudolph, S.138) として位置づけ、その資料的意義を訴えている。
- (4) Vgl. Weichelt, H. : Zarathustra-Kommentar. Leipzig 1922, S.218.
- (5) テンニースとパウルゼンの両者が知り合った直接のきっかけは、パウルゼン主催のカント演習(『純粹理性批判』講読)にテンニースが参加したことであった。テンニースの報告によれば、パウルゼンはしばしば若い学生を「ドロシー通りにある古風なベルリン料理の店カフェ・スイスに連れて行き、グラスビール片手に2時間ほど語り合うのを習慣としていた」(1922,S.206) という。テンニースもこうした学問的・人間的な交際を通してパウルゼンの魅力を感じたのであろう。
- (6) また同年に送られた別の手紙(1880年11月9日付)には次のように書かれている。——「(……) ただニーチェの病気はかなり重症です。彼がまもなく死んでしまうことを覚悟しておく必要があるかもしれません。残念なことです。」(Briefwechsel, S.98)
- (7) 1883年の出来事についてテンニース自身は次のように振り返っている。——「1883年は再び私の運命を変える年となった。5月8日に愛する父親が死亡し、親しかった叔父も同時期にこの世を去ったのだ。(……) パウルゼンが私をベルリンに呼び寄せた。パウルゼンは妻の突然の死に相当ショックを受けていた。それから数週間後、私はベルリンからスイスに赴いた。わずかな時間だったが私はスイスでルー・ザロメ婦人およびパウル・レー博士という二人の興味深い人物と一緒に過ごした。ただ二人はかつての友人ニーチェと激しく仲違いしていた。結局この二人のもとを離れて数日間ジルスマリーアに滞在したのに私がニーチェと個人的に知り合うことができなかった原因のひとつはこれである。ただジルスマリーアで私は何度もその孤独な隠者に遭遇したし、視力の弱い彼の両目から刺すような視線が私に向いているのもわかっていた。」(1922, S.213-214)
- (8) たしかにテンニースは熱狂的なニーチェファンであったが、小心者の一面ものぞかせている。——「私は一度ナウムブルクへ彼を訪ねようとしたが、彼が不在だったため、品のよい彼の母親と親しく会話をさせてもらった。ときおり私は彼に長い手紙を——頭の中で書いた。実際に手紙を書いたり手紙を郵送したりすることは臆病な性格の私にはできなかった。」(1922,S.214)
- (9) ある思想や言葉が著作や論文において援用されることを「受容」と呼ぶなら、「超人」を最初に受容したのは文学界であった。後にノーベル賞を受賞したハイゼも含め、ヴィルブラント、ブライプトロイ、コンラーディ、ズダーマン、ヴェデキントなど、その数は枚挙にいとまがなく (Vgl. Hillebrand 1978, S. 18), またその規模は1897年の著作『現代文学における超人』の中でベルクが「超人」受容に関するレビューを報告できたほどである。文学作品におけるこの「超人」人気を、ニーチェ思想の「誤解」に基づく

単なる「通俗的な超人崇拜 (trivialen Übermenschenskult)」と説明することも可能である (Hillebrand 1978, S.5)。しかし同時にこうした文学作品は、当時の人々 (とりわけ青少年) が「超人」という言葉をどう受容していたのかを知る貴重な手掛かりでもある。

- (10) 芥川龍之介の小説『河童』(1927年発表)にも「超人クラブ(超人倶楽部)」という同好会が登場する(新潮文庫79-80頁)。同所には、1890年代ドイツで展開されたNブームを思わせる状況描写が見られる。「『僕か?僕は超人(直訳すれば超河童です)だ』—トックは昂然と言い放ちました。こう云うトックは芸術の上にも独特な考えを持っています。トックの信ずる所によれば、芸術は何ものの支配をも受けない、芸術の為の芸術である、従って芸術家たるものは何よりも先に善悪を絶した超人でなければならぬと云うのです。尤もこれは必しもトック一匹の意見ではありません。トックの仲間の詩人たちは大抵同意見を持っているようです。現に僕はトックと一しょに度たび超人倶楽部へ遊びに行きました。超人倶楽部に集まって来るのは詩人、小説家、戯曲家、批評家、画家、音楽家、彫刻家、芸術上の素人等です。しかしいずれも超人です。彼等は電燈の明るいサロンにいつも快活に話し合っていました。のみならず時には得々と彼等の超人ぶりを示し合っていました。たとえば或彫刻家などは大きい鬼羊歯の鉢植えの間に年の若い河童をつかまえながら、頻に男色を弄っていました。又或雌の小説家などはテーブルの上に立ち上がったなり、アブサントを六十本飲んで見せました。尤もこれは六十本目にテーブルの下へ転げ落ちるが早いか、忽ち往生してしまいましたが。」
- (11) ニーチェが『道徳の系譜』第三論文「禁欲主義的理想は何を意味するか」において「精神の自由」のモットーとして用いたフレーズである。
- (12) 「ニーチェの通俗化は文学上の陳腐化 (literarischen Trivialisierung) から路地裏の粗野な言動 (Gassen-Rüpelei) にいたるまであらゆる領域で行われた」(Hillebrand 1978, S.13) とヒレブランドも指摘するように、1890年代のNブームは単に紙面上の行為にとどまらなかったのである。
- (13) 「価値転換 (Umwertung)」(1893, S.VII) が1990年Reprint版では Unwertung と誤表記されている (1990, S.10)。
- (14) 「哀れなニーチェよ!」というテンニースの同情的フレーズの背後には、自らの都合次第でニーチェ思想を操る「ニーチェばか」の存在があったわけだが、興味深いことにテンニースはその一人としてシュタイナーの名前を挙げている。テンニースは1893年の論文「ニーチェばか」の後半部——1990年Reprint版未収録——でシュタイナー批判を繰り広げる。その批判は例えば次のようなものである。「『現代的な』シュタイナー氏 („modernen“ Herrn Steiner) と比較すれば、たしかにカントは衰弱した概念障害者 (ein kümmerlicher Begriffskrüppel) かもしれない。しかしこの哀れな障害者に対して頭ごなしに独自の思想をぶつけるシュタイナーの行為はやはりいくぶん——無神経であると言わせてもらおう。」(1893, S.15) ※このようにテンニースのシュタイナー批判は必ずしもニーチェ思想をめぐるものではない。「シュタイナー氏は世界史のABC (das ABC der Weltgeschichte) すら知らない」とか「表面的な思考能力しか持たない者 (ein Oberflächlich-Denkender)」という酷評はシュタイナー自身に向けられたものであろう (1893, S.21)。ただこうしたシュタイナーのごとき人物に限って「ニーチェの正統なる弟子」を名乗る傾向にあるとテンニースはいう。「哀れなニーチェよ!」とは、よい弟子に恵まれないニーチェの境遇を皮肉った同情の言葉なのである。
- (15) むろんテンニースにとってニーチェの後期思想は批判すべき対象であったが、一方で彼はニーチェ思想が文学青年たちによって都合よく利用されているというニーチェのいわば被害者的側面をも指摘している。テンニースによれば、多くの信奉者がニーチェの道徳批判を恣意的に解釈し、「道徳など笑うべきモノである (Moral ist lächerlich)」とか「自由精神に道徳は適用されない (Moral gilt nicht für freie Geister)」などといった自分たちに都合のよいスローガンを並べたという (1893, S.10)。テンニースにと



ってNブームは、「道化師 (Lustigmacher)」である文学青年たちがニーチェを「マネキン人形 (Gliederpuppe)」のごとく操る現象と認知されたのである (1893, S.22)。

- (16) テンニースがパウルゼン宛の手紙の中でニーチェの名前を出したのは、1883年以降ではこのときがはじめてである。
- (17) パウルゼンは同じ手紙 (1897年2月4日付) の中でニーチェに対する酷評を展開している。——「それこそまさに彼の思考に当初から見られた病理学的な側面 (pathologische Seite) です。自分の場合には理念がほとんど病的な域に達している——これは以前の彼自身の発言です。あまりにも豊かな発想力を持っていること、自分の考えを規律化したり制御したりする能力があまりにも乏しいこと (allzu geringe Fähigkeit, sein Denken zu disziplinieren und zu kontrollieren), これらは彼が最初から持っている性向なのです。ゲーテはかつてこう言っています。あらゆるものに対して敬意を払わない行為は決して利口とは言えないと。これはニーチェにこそ当てはまることです。ついだから言っておきますが、自分の着想を論理的・客観的に制御すること (logisch-sachlichen Kontrolle) への責任感や義務感が彼には欠落しているのです。」 (Briefwechsel, S.321)
- (18) ニーチェを痛烈に批判した1897年著作『ニーチェ崇拜』においても、青春時代のニーチェ読書の思い出は好意的に描かれている。——「私はある時期この作家に夢中だったことがある。(限られた同好会を除けば) まだ誰も彼のことを知らない時期である。彼の初期の著作が出版された当時、私は16-20歳だった。彼は私に多くのことを語りかけ、そして私は彼のことを理解したい、彼に共感したいと考えた。彼に導かれるかたちで私はショーペンハウアー哲学やワグナーの芸術にも近づいた。畏敬の念を抱いていた。だから私には彼がこの両者から突然離反したことがしばらく理解できないでいたし、より深い見解から浅瀬まで彼が移行したように見えた。それでも私は彼の新作を熱心に読み、多くの刺激と歓びを感じていた。私自身の考えと彼の考えがあまりに近い関係にあることが私にはしばしば不思議に思えたほどである。」 (Tönnies 1897, S.V)
- (19) 例えば飯田哲也『テンニース研究——現代社会学の源流——』ミネルヴァ書房、1991年を参照。パウルゼンとの交友関係に関する詳細な叙述、ホップズ、スピノザ、ショーペンハウアーからの影響に関する言及は確認できるにもかかわらず、ニーチェの名前は一切登場しない。辛うじてテンニース著作一覧に1890年代のニーチェ論がリストアップされているのみである。
- (20) テンニースはむしろラガルデ (Paul de Lagarde) に興味を示している。「ひとつのゲマインシャフトの中でしか善 (Gute) は育まれない。このことは偉大なる著述家パウル・ド・ラガルデもその深い認識から明言しているとおりである。」 (1893, S.17)——少なくとも社会学者としてのテンニースにとってはニーチェよりもラガルデの方が信頼できる存在だったようである。
- (21) テンニースは「多くを与えられた人から、多くのことが要求される (Wem viel gegeben, von dem wird viel gefordert) !」という言葉こそがニーチェ思想のスローガンであると述べ (1893, S.7), ニーチェに「資本主義の哲学者」のレッテルを貼る。

## 参考文献

### ○ニーチェの著作

- *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe*, 15Bde. (einschl. Kommentar u. Konkordanz), Hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari. (de Gruyter/dtv) München, Berlin/New York 1980. (KSAと略記)

○F・テニースの著作・論文および書簡

- Tönnies, F. : Nietzsche-Narren. In : „Ethische Cultur“ und ihre Geleite. Berlin 1893, S.5-29.
- Tönnies, F. : Der Nietzsche-Kultus. Eine Kritik. Leipzig 1897.
- Tönnies, F. : Selbstdarstellungen. In: Schmidt, R. (Hrsg.): Die Philosophie der Gegenwart in Selbstdarstellungen. Bd.3. Leipzig 1922, S.199-234.
- Olaf Klose u.a.(Hrsg.): Briefwechsel 1876-1908, Ferdinand Tönnies und Friedrich Paulsen. Kiel 1961.

○その他の参考文献

- Servaes, F. : Nietzsche und der Sozialismus. In : Freie Bühne für den Entwicklungskampf der Zeit. 1892, S.85-88. u. S.202-211.
- Mayreder-Obermayer, R. : Der Klub der Übermenschen. In : Neue Deutsche Rundschau 6 (1895), S. 1212-1228.
- Berg, L. : Der Übermensch in der modernen Litteratur. Ein Kapitel zur Geistesgeschichte des 19. Jahrhunderts. München 1897.
- Hillebrand, B. : Nietzsche und die deutsche Literatur. 1. Texte zur Nietzsche-Rezeption 1873-1963. Tübingen 1978.
- Rudolph, G. : Friedrich Nietzsche und Ferdinand Tönnies. Der ‘Wille zur Macht’ widerlegt von den Positionen eines ‘Willens zur Gemeinschaft’. In : Der Nietzsche-Kultus. Eine Kritik. Berlin 1990, S. 107-139.
- 大石紀一郎ほか編著『ニーチェ事典』弘文堂，1995年。